

六、隊列ノ編成 全校生徒ヲ平素訓練ノ際ニ於ケル區分ニ從ヒ五

個中隊ニ編成シ中隊長及小隊長ニハ生徒ヲ以テ之ニ充テ各中隊間ノ距離ハ十メートルトシ其間ニ職員ヲ配置シテ監督セシメ校旗ヲ先頭ニ隊伍整然ト行進ス

七、遵守事項 行進中ハ取締官ノ指揮ニ從ヒ國旗以外ノ器物ヲ携帶セシメズ

八、通行経路 校庭ヨリ上野公園ヲ經テ上野廣小路ヲ通り神田旅籠町ヨリ右折シテ佐柄木町ニ出デ小川町ヲ左折シテ神田橋ヲ渡リ馬場先門ヨリ二重橋前廣場ニ至リ萬歳ヲ齊唱シテ解散ス

〔自昭和十二年庶務掛雜書類掛〕  
〔至の十三年庶務掛雜書類掛〕

なお、東京音楽学校ではこの非常時局に際し国民精神総動員の趣旨を發揚すべく「聖戦讚歌」(作歌者乗杉嘉寿、選曲者東京音楽学校)を作成し、昭和十二年十二月十五日に本校を含む各方面に配布した。



昭和12年12月14日 南京陥落慶祝旗行列  
中央芝田徹心校長 旗手 小森五郎  
(小森五郎氏提供)

#### ⑭ 日本画科生徒の意見

昭和十二年、日中戦争が勃発しようとしていた時期に、美術界は松田改組後の混乱の余波が続ぎ、その中で、「新しい藝術運動がほとんど起りうる餘地がないといった行きづまりが、この數年來の美術界の實情なのである。」(下店静市。同年一月二十日『大阪時事新報』)とか「横山大觀氏の東洋精神主義といふ言葉を近頃しばしば見聞する。」(藤田嗣治。同年二月五日『報知新聞』)などということが言われていたが、日本画の分野では行きづまり状況を打破するために幾つかの新しい組織が生まれた。同年二月二十八日に本校日本画科の事実上の主任教授結城素明が川崎小虎、青木大乗らと作った大日美術院もその一つである。ただし、その趣旨というのは、「従前の歪んだ日本主義を排して佛敎渡來以前の眞の日本主義によつて制作に當る」(同年三月一日『東京日日新聞』)という、大分注釈を要するもので、またその活動もそれほど新鮮味のあるものではなかった。

こうした状況のもとで日本画科生徒たちの煩悶は徐々につのが、前述の同科改革問題(175頁参照)も一向に進展を見ず、問題解決の見通しはつかなかった。左記の文は右の状況下における一生徒、校友会委員の猪飼俊一が書いたものである。猪飼は昭和十四年同科卒。第三回新文展に入選したものの、翌年一月に入營、十七年一月にフィリピンで戦死した。

所謂新日本畫より學校に於ける我々の仕事を思ふ

猪飼 俊一

近頃所謂日本畫の新傾向の展覽會が處々に開かれ、新日本畫

展、煌土社、大日展と夫々舊來の日本畫なる概念の殻を脱して、自由なる現代の空氣の中へ躍り出様と試みて居る。

事實、日本畫家が現代人である限り、此の傾向は一つの過程として當然認めらる可き物であつて、東洋、精神畫を固執する餘り、日本畫家は羽織はかまで省線の乗り降りに不便を感じなければいかんと云つた、横山大觀氏は氣の毒にもその當時頭が變であつたに過ぎない。

『現代の若い作家は視覺を重んじ過ぎて外面の形に支配され、老莊、禪の無爲枯淡、東洋本來の虛無の精神を忘却してしまつた。困つた物だ』

勝手に困るが宜敷い。

彼は廿世紀の青年に、近頃君達は霞を一向食はないで、コーヒーばかり飲んで居るではないか、と怒るのである。而らばさう云う大觀老は何處深山幽谷に浮世離れて暮して居るのか。

『昔でも名家は大名に養はれて居たし、今でも若い作家で有望な者は後援者があつて援けて居るのです』

要するに彼は、お金持の被<sup>庇</sup>護に依つて大きな邸に住んで居るものだから、市井の騒音が耳に入らないに過ぎない。

その自分の特權的な境遇を頭<sup>に</sup>置かず現代の青年にまで、そのままそれを強要する處に根本的な誤謬があるのだ。

大觀老の神懸りの御託宣にもかゝらず、今日の若い作家は、云ふ處の虛無の精神とは正反對に、寧ろ現代的な物にまともに進んで行かうと努めて居る。

此の傾向たるや次の時代の日本畫を生み出して行く可き唯一の

可能性ではあるが、果して此の流行新日本畫的傾向の中に、明日を生み出す強じんな力があるであらうか——疑無きを得ない。

作家の内面的な時代性の缺亡は勿論(さればこそ)その表現された繪畫自體、猶多くの裝飾的、技巧的に過ぎなかつた過去の殘滓をくつつけたまゝで居る。

洋畫の外面的な面白味は取り入れても、その依つて來る根本的な精神は到底在來の日本畫家的鑑賞の手に負へる物ではない。今までに育まれて來た精神が違ふのである。

相變らずの低調な日本畫家的精神に、近代味の安白粉を附けたに過ぎぬ作品が餘りにも多い。しわの深い無氣力の肌に幾ら白粉を塗つても若くはならん。

根本的なデッサンの不足は工藝的、圖案的な對象の類型描寫を脱せず、その近代味は岩田專太郎的な通俗さに止つて居る。

日本畫は、日本畫の圈の中に於てのみ通用する物であつてはならない。洋畫に對し、彫刻に對し堂々その藝術性を戰はせ得る物でなければならぬ。古來の日本畫の名品は、其藝術的な高さに於いて遙に洋畫をしのいで居る。

現代の大家の中にも洋畫の間に交つて裕々遜色無き物少しとせぬ。

然し、我々の若きゼネレーションが、今、此の傾向を取つて、かゝる進み方をして居る時、果してそれは、洋畫のそれに對して藝術的に拮抗し得る物であるか何うか。

日本畫だから通用する——洋畫の人から見れば下手なグワッシユにまだ劣ると思はれる様な作品が餘りにも多くはないだらう

か。

それは造型的な基礎勉強の不足である。形、色に對する類型的な解釋、實在感の稀薄さ。安易な質感。結局それは藝者の洋装に過ぎない。内輪の脚のハイヒールだ。いづれ此等の先輩達も次第に洋装が板に附いて來るに違無い。然し我々これから出發する者は、洋畫的な追求を是認する限り、洋畫と同じスタートに立たなければならぬ。

成程現に學校でも、デッサンはやつて居る。然しあれが果して此の新しき出發の基礎勉強として充分であるか何うか——疑ふまでも無い。一年生になつて始めてかく石膏デッサンは一年間に僅かに數枚、形も取れなければ、調子も擱めない。責任ある嚴格な指導者を持たない、此の時間は、遊び半分の骨休みにあてられる。石膏一つ満足にもかけないのに二年になると人物のコスチュームに移る。光線は悪く、みてもらへる指導者は無い。競技と競技の穴埋めにあてられた此の時間は益々概念描寫を助長する。三年、四年の人體デッサンに到つては残念ながら他科の人には見せられぬ代物である。

日本畫には日本畫のデッサンがある筈だ。成程、命題としては存在す可き筈である。然し祖先の高き藝術的感動の振幅が、時代下れる今日の、而も驅け出しの小僧子たる我々にそう簡單にあひ得るとは思へない。取り入れ得たと思つた時、それは單なる口繪的な低調さに終つて居る事が多いのだ。

デッサンとして勉強する限り、私は、洋畫風で徹底し、基礎を固めた方が良いと思ふ（日本畫である以上、いつまでも其處に止

らず、東洋的なる物を取り入れ更に高き境地へと進む可きは當然であるが）學校に於けるデッサンも勿論此の方針で課されて居る筈である。

遠く三〇年の昔、岡田三郎助先生、歸朝當初、日本畫科のデッサン課業は岡田助教授の指導の下に洋畫の教室に於て本格的に勉強された由であり、又黒田清輝氏が世當時、現在の日本畫主任、結城先生は二年間日本畫も洋畫と一緒に勉強させ、然る後此を二分する方法を計畫され、小林萬吾先生を委員として起草の運びとなつたが校長正木先生に一笑に附され、それなりになり終つた事もある由。

結城先生御自身も日本畫科卒業後平福先生と共に更に洋畫科に學ばれたと聞く。

結城先生、川崎先生は大日展の指導者である。新しい、日本畫の基礎として、洋畫と同じ物の把握力を認めて居られる筈である。此の基礎なくして、洋畫と同じスタートに立つ事無くしては、所謂新日本畫は結局洋畫の外面的な模倣に終り、強力な新日本畫の展開は到底望み得ない。

勿論古畫の研究も必要であるが今の四年生は去年結城先生にお願して種々その施設に對し内諾を得たとか。

即ち、日本畫教官室の隣の圖書室を開放して頂くこと。正木直彦氏にでもお願して古畫の技法を講義して頂くこと。等何れもクラス會席上快諾を得た由である。

然し、古畫の研究は結城先生もおつしやる通り仲々早急に行く物ではなく一生懸つて完成す可き物故、在學中は結局その入門、

手引の程度を越える事はむづかしいであらう。此に反し、木炭デッサンの課業の充實は刻下の急務であり、現に行ひつゝある勉強の効果を更に徹底させるに過ぎないのだから遙に實現簡單なりと思惟する次第である。

工藝科の方では伊原宇三郎先生がその指導に當られ非常な熱心さでピシ／＼直して頂ける由である。私は羨望にたへない。

今日の日本畫に缺けて居る物はどつしりとした重み、大きさ、質感、實在感である。東洋の古名畫の大き、緊密さ、重さは今日の我々には洋畫的な、物に對する見方から、始めて之に近附き得るのではあるまいかとさへ思へる。近時多く見られる日本畫の友禪文様の、圖案的なるは此の實在感の不足に依る物である。

若し今の木炭畫デッサンを、伊原先生の如き洋畫の専門家の嚴しい指導下に置いて、明日の若き日本畫家群の繪畫的根底を固めると同時に、結城先生始め日本畫の諸先生の手による日本畫の傳統的優秀さに對する啓發が積極的に行はれる様になつたならば、此の美校の日本畫科は必ずや來る可き日本畫界の原動力となり日本畫壇のレベルの向上に資する事大なるを信じて疑はないのである。

私もすでに三年、卒業まで僅か一年半を残すのみであるが、一般總務委員<sup>〔委〕</sup>を拜命するに當り、一年前の丁度今頃、各クラスより提出された希望書再讀の機會を得絃上の感を深くする事新に此處に拙文<sup>〔本〕</sup>を草せる次第である。

日大畫百名の生徒諸君、以て如何と爲す。

『東京美術』第十一号。昭和十二年六月

### ⑮ 『東京美術』創刊

昭和十二年六月三十日、従来の校友会機関誌『校友会會報』は標題を『東京美術』と改められ、号数は旧誌第十号に引き続いて第一号として発行された。毎年二、三回発行され、昭和十五年二月発行の第十八号で廃刊となつたこの機関誌は、大きさこそもとの『東京美術学校校友会月報』と同じB5判に戻つたが、内容は著しく異なり、文芸雜誌的傾向が強いものとなつた。因みに第十一号の目次は次のとおりである。

ヒューマニズムと繪画に就いての覚書

小松 清

現代文学の問題

伊藤 整

ヒューマニズムに就いて

杉山 平助

白い手紙

山口 寅夫

地の人

杉本 博

斑猫・外

遠藤 健郎

透明なる果実

山口 寅夫

麦

井手 則雄

「DATE 210」

塩釜 忠磨

東西繪画の伝統技術の追求とその克服

若林喜久平

廿世紀的性格の一つ

梶田 英一

所謂新日本画より学校に於ける我々の仕事を思ふ

猪飼 俊一

○校友会各部報

○校友会記事

○文庫彙報

編輯後記